

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載

【部門区分】第3部門第2区分

【発行日】平成26年1月23日(2014.1.23)

【公表番号】特表2013-505206(P2013-505206A)

【公表日】平成25年2月14日(2013.2.14)

【年通号数】公開・登録公報2013-008

【出願番号】特願2012-529144(P2012-529144)

【国際特許分類】

C 07 D 255/02	(2006.01)
B 01 J 31/22	(2006.01)
B 01 J 37/12	(2006.01)
B 01 J 37/04	(2006.01)
C 07 F 13/00	(2006.01)
C 07 F 15/02	(2006.01)
C 07 F 19/00	(2006.01)

【F I】

C 07 D 255/02	
B 01 J 31/22	Z A B M
B 01 J 37/12	
B 01 J 37/04	1 0 2
C 07 F 13/00	A
C 07 F 15/02	
C 07 F 19/00	

【誤訳訂正書】

【提出日】平成25年11月28日(2013.11.28)

【誤訳訂正1】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0017

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0017】

ラジカルRとして記載したアルキル基は、好ましくはC₁~C₄-アルキルであり、そしてラジカルRとして記載したアリール基は、好ましくはC₆H₅(フェニル)である。

【誤訳訂正2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0023

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0023】

段階a)におけるマンガン(II)塩および場合により追加的に鉄(II)塩の配位子Lとの反応は、本発明により、唯一の溶剤としての水において実施される。好ましくは、二価金属塩または金属(II)塩(すなわち、マンガン(II)塩および場合により追加的に鉄(II)塩の合計)および錯化合物が合わせて100重量部の水あたり少なくとも15重量部の量で存在するのに十分な水のみが使用される。金属(II)塩および錯化合物の濃度の上限は非常に高くてよく、なぜならば、このおよびさらなる反応は、溶液中でも懸濁液(分散液)中でも実施することができるからである。従って、濃度上限は本質的に、反応混合物の攪拌能力(Ruehrbarkeit)に依存し、攪拌能力はまた空時収量に対する限定因子もある。従って、金属(II)塩および配位子は合わせて、10

0重量部の水あたり、好ましくは15～55重量部、特に好ましくは20～50重量部の量で使用される。水中における金属(II)塩の配位子Lとの反応は、10～30、好ましくは15～25（室温）の温度で、および大気圧で実施される。本発明の方法の段階a)は、溶剤混合物に溶解した、金属(II)塩および配位子化合物からの配位化合物を形成させる。水中における金属(II)塩および配位子の量の計算では、場合により金属(II)塩に含有される結晶水を溶剤である水に含める。